

目次

注……………11

はじめに……………13

献辞……………17

エピソード……………17

作者より……………18

第一編 ある家族の歴史……………18

第二編 場所柄をわきまえない会合……………29

第三編 好色な男たち……………48

第四編 病的な興奮……………67

第五編 プロとコントラ……………76

第六編 ロシアの修道士……………97

第七編 アリョーシャ……………105

第八編 ミーチャ……………112

第九編 起訴前の取調べ……………129

第十編 少年たち……………138

第十一編 兄イワン・フョードロヴィチ……………148

第十二編 誤審……………169

エピソード……………188

解説……………191

ドストエフスキー略年譜……………243

あとがき……………251

図版出典一覧……………255

注

はじめに

訳注の作成にあたって

一、本書は Федор Михайлович Достоевский, Братья Карамазовы, 1880 の全訳である。翻訳の底本には A を用い、適宜 B、C も参照した。

A Достоевский, Ф. М., Полное собрание сочинений в тридцати томах, Л., Наука, 1972-1990, т. 14-15, 1976.

B Достоевский, Ф. М., Собрание сочинений в десяти томах, М., Художественная литература, 1956-1958, т. 9-10, 1958.

C Достоевский, Ф. М., Братья Карамазовы, СПб., Пушкинский дом, 2011.

校正に際して、主として C を参照した。C では A になくわずかあった誤植が訂正されている。C のテキスト校訂上のもっとも特筆すべき特徴として、宗教関係の表記の変更があげられる。A はソヴィエト時代の刊本であったがゆえに、神、主を表わす名詞や物主形容詞が бог, господь, божи́и など、キリストに関わる人称代名詞が ты, он, твой, его などと小文字表記になっていたものが、C では革命以前の大文字表記 (Бог, Господь, Божи́и, Ты, Он, Твой, Его) に戻している。

二、注釈の作成にあたっては、A の第十五巻所収の B・E・ヴェトロフスカヤの注釈に負うところが大きい。ヴェトロフスカヤの注釈は増補・改訂されて、次の書に収録された。

D Велидовская, В. Е., Роман Ф. М. Достоевского «Братья Карамазовы», СПб., Пушкинский дом, 2007.

B の第十巻所収の Л・П・グロスマンの注釈も参考にした。

英語の注釈書として、次のものがある。

E Terras, Victor, *A Karaginazov Companion. Commentary on the Genesis, Language and Style of Dostoevsky's Novel*, Wisconsin, The University of Wisconsin Press, 1981.

また、以下に掲げる既訳のうち、H、L、N、O、P、Q、R には巻末注釈が付されている。H と O はグロスマン (B)、L と R はヴェトロフスカヤ (A)、それ以外は A とテラス (E) を参考にしたものだが、L は江川独自の調査による注釈も相当数あり、適宜参考にした。

これらの注釈に含まれていない項目は、ロシア語、日本語の各種辞典、百科事典を参考にして訳者が独自に作成した。とくにレアリア関係、聖書関連、ドストエフスキーの使用した語彙に関しては、それぞれ以下の辞典に多くを負っている。

Энциклопедический словарь в 86-и томах, СПб., Брокгауз-Ефрон, 1890-1907 (M., Терра Reprint, 1990-94, 『ブロックハウス＝エフロン百科事典』と略記)。

Символика к синодальному изданию Библии, Корнваль, Свет на Востоке, 1995 (『聖書コンローダニス』と略記)。

Учреждение РАН Институт им. В. В. Виноградова РАН, Словарь языка Достоевского. Идиоглоссарий, М., Азбуковник, 2008. (『ドストエフスキー 語彙辞典』と略記。現在刊行中で第四巻 (10 の項) まで既刊)。

三、参考にした既訳は次の十三種である。

F ドストエーフスキー『カラマゾフの兄弟』米川正夫訳、岩波文庫(全四巻)、『一九二七年～一九二八年』。

G ドストエーフスキー『カラマゾフの兄弟』原久一郎訳、新潮文庫(全五巻)、『一九六一年』。

H ドストエーフスキー『カラマゾフ兄弟』小沼文彦訳、筑摩書房(『ドストエーフスキー全集』第十一巻、第十二巻)、『一九六三年』。

I ドストエーフスキー『カラマゾフ兄弟』北垣信行訳、講談社(『世界文学全集』第四十五巻、第四十六巻)、『一九七五年』。

J ドストエーフスキー『カラマゾフの兄弟』池田健太郎訳、中公文庫(全五巻)、『一九七八年』。

K ドストエーフスキー『カラマゾフの兄弟』原卓也訳、新潮文庫(全三巻)、『一九七八年』。

L ドストエーフスキー『カラマゾフの兄弟』江川卓訳、集英社(『世界文学全集』第四十五巻、第四十六巻)、『一九七九年』。

M ドストエーフスキー『カラマゾフの兄弟』亀山郁夫訳、光文社古典文庫(全五巻)、『二〇〇六年～二〇〇七年』。

N Dostoevsky, Fyodor, *The Brothers Karamazov*, translated, introduced and annotated by Richard Pevear and Larissa Volokhonsky, London, Vintage Books, 1992.

O Dostoevsky, Fyodor, *The Karamazov Brothers*, translated with an Introduction and Notes by Ignat Avsey, Oxford University Press, 1994.

P Dostoevsky, Fyodor, *The Brothers Karamazov*, translated with an Introduction and Notes by David McDuff, London, Penguin Books, 1993.

O Dostoevski, Fiodor, *Les Frères Karamazov*, traduction, introduction, chronologie, biographie et notes par Kyra Samine, Paris, Éditions Garnier Frères, 1969.

R Dostojewski, Fiodor, *Die Brüder Karamasow*, Roman in der Neubersetzung von Swelana Geier, Frankfurt am Main, Fischer Taschenbuch Verlag, 2006.

四、新約聖書からの引用、レミニサンス、暗示については、A、D のほかに、以下のキリル文字を参照した。これはドストエフスキー所蔵の一八二三年刊行の新約聖書がマンマシシリ版 (Евангелие Достоевского в двух томах, М., Русский мир, 2010) で復刻された際に、その第二巻 (Исследования. Материалы к комментариям) に収録された論文(『』)の種の研究に基づいて最新に訂正し、かつ、網羅的、徹底的なものである。

5 Tikhomirov, B. N., Отражения Евангельского Слова в текстах Достоевского. Материалы к комментариям, в кн.: Евангелие Достоевского в двух томах, М., Русский мир, 2010, т. 2, стр. 63-469.

五、『カラマゾフの兄弟』以外のドストエフスキーの作品、手紙、草稿などの引用、言及は、ナウカ版三十巻全集 (*Достоевский, Ф. М., Полное собрание сочинений в 30-и томах*, Л., Наука, 1972-1990) に基づく。PCC と略記のページ、巻数と頁数を記した。例：PCC, 1・100 は全集第一巻一〇〇頁を指す。

六、ロシア語関連の語彙を積極的に利用した辞典類は次のとおりである。

РАНЛПН, Большой академический словарь русского языка, М., СПб., Наука, 2004 (『ハナシマール辞典』と略記。ただし、現時点では第二四巻 Свертлься まで既刊、未刊行部分の語彙などの前身 АН СССР, Словарь современного русского литературного языка в 17-и томах, М., Л., Наука, 1950-65 (『十七巻辞典』と略記) を見た)。

Ушков, Д. Н., Толковый словарь русского языка в 4-х томах., М., ПИС, 1935-40 (M., Терра Reprint, 2007, 『ハンマロン辞典』と略記)。

Даль, В. И., Толковый словарь живого великорусского языка в 4-х томах, под. ред. И. А. Бодуэна-де-Куртене, 4е испр. и значит. доп. изд. СПб.-М., Т-во М. О. Вольф, 1912-14 (東京、Наука Reprint, 1977, 『タール辞典』と略記)。

Магальсон, М. И., Русская мысль и речь. Свое и чужое. Опыт русской фразеологии в 2-х томах, 1903-04 (東京、現代ロシア語社 Reprint, 1981, 『マクソンン表現辞典』と略記)。

Акулинич, А. А., Кино, Х., Акулинич, Т. Е., Жесты и мимика в русской речи, М., Русский язык, 1991 (『身振る辞典』と略記)。

ロシアの旧度量衡

長さの単位

ヴェルスタ 一・〇六七キロメートル

サーシェン 二・一二四メートル

アルシン 七一・一二センチメートル

ヴェルショーク 四・四四五センチメートル

重量の単位

プード 一六・三八〇キログラム

フント 四〇九・五一二グラム

面積の単位

デシヤチーナ……一・〇九三ヘクタール

液量の単位

ヴェドロ……一二・二九九リットル

シトフ……一・二三リットル(ウオッカ、ビール)／一・五四リットル(ワイン)

プトウイルカ……〇・六二リットル(ウオッカ、ビール)／〇・七七リットル(ワイン)

貨幣価値

帝政ロシア時代の通貨はルーブリとコペイカがあった。一ルーブリ＝百コペイカ。

貨幣価値の換算は容易ではなく、諸説あるが、藤沼貴の試算に説得力がある(試算の根拠と詳細は、藤沼訳・トルストイ『戦争と平和(一)』岩波文庫、二〇〇六年、一五七頁を参照)。藤沼によれば、十九世紀なかばの一ルーブリは一万円程度に相当する。ただ、藤沼も指摘していることだが、ことはそう単純ではなく、これにはいくつかの留保がつく。まず、当時の通貨には金貨、銀貨、紙幣があった。一ルーブリ＝一万円相当は金貨でのことで、金貨、銀貨、紙幣で同じ額面でも実質価値が異なり、紙幣は銀貨の七分の二、金貨の五分の一の価値しかなかった。だが、これは一七六九～一八四九年の公定レートであって、『カラマーゾフ』の物語の展開する一八六〇年代末には当てはまらない。この時期、金貨、銀貨、紙幣が同一価値になったかどうか、あるいは価値に違いがあったのか、違いがあったとすれば、どんなレートだったのかといった点について、訳者は、残念ながら、判断する材料を持ちあわせていない。

周知のように、『カラマーゾフの兄弟』では金銭が重要な役割をはたす。作中で示される金額を具体的にイメージするために、藤沼方式に従って、そのつど訳注で円相当額を示すことにする。たとえば、第一編第一章には、フォードル・パーヴロヴィチは死後、十萬ルーブリの遺産を遺したとあるが、十萬ルーブリは金換算だと約十億円、紙幣換算で約二億円に相当する。ただし、本翻訳では煩雑さを避けるため、とくにごとわらないかぎり、紙幣換算で示す。

注

献辞

(1) アンナ・グリゴリエヴナ・ドストエフスカヤ(一八四六～一九一八) ドストエフスキーの二度目の妻で、一八六七年に結婚した。この献辞は雑誌『ロシア報知』連載時にはなく、単行本の刊行時に新たに付された。ドストエフスキーはこれ以前の作品では、中編小説『白夜』(一八四八)を詩人アレクセイ・ニコラエヴィチ・プレシチエーエフに、『虐げられた人々』(一八六一)を兄ミハイル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキーに、『白痴』(一八六九)を姪ソフィア・アレクサンドロヴナ・イワーノワに捧げていたが、いずれも雑誌初出のみ(『白夜』は一八六〇年にも)で、生前最後の刊本ではそれぞれの献辞は削除されたので、献辞はこれが最初で最後となった。(図1)

エピグラフ

(1) 『ヨハネによる福音書』第十二章第二十四節 引用はロシア聖書協会刊行の新約聖書(一八二三)による。これは一八五〇年一月、シベリア流刑の途上、トボリスクでデカブリストの妻H・H・フォンヴィージナから贈られたもので、ドストエフスキーは生涯座右に置いて愛読した。作家個人蔵の聖書は近年フアクシミリ版が刊行された(Евангелие Достоевского. Личный экземпляр Нового Завета 1823 года издания, подаренный Ф. М. Достоевскому в Тобольске в январе 1850 года. М., Русский мир, 2010)。それを見ると、この箇所はドストエフスキーは鉛筆で印をつけている。一八二三年版新約聖書は現行聖書(一八七六)や最新訳(二〇一一)とは本文に若干の異同があり、ロシア語は多少古めかしい。本翻訳での聖書の引用は、基本的に日本聖書協会発行の新共同訳聖書を用いるが、教会スラヴ語訳聖書から引用される箇所もあり、その場合は文語訳聖書を用いる(旧字は新字に改める)。ロシア語聖書の原文解釈が日本語訳のそれと異なる場合には、塚本虎二訳『福音書』、岩波文庫、一九六三年、新約聖書翻訳委員会訳『新約聖書』、岩波書店、二〇〇四年を参考に若干の修正を加えることがある。(図2)

作者より

- (1) **実践家** 原語は деятель だ、『カラマゾフの兄弟』の鍵語の一つ。ここで「実践家」と訳した деятель の一般的な使用例には политический деятель [政治家]、партийный деятель [党活動家]、профсоюзный деятель [組合活動家] などがあり、アリョーシヤを деятель と定義する語り手の言ひ「*но*」によると、読者は違和感を覚えるかもしれない。だが、деятель の対立概念が мечтатель [空想家] とその末裔である попойный человек [地下室人] だと考えれば、納得がいこう。第二編第四章七七―八〇頁、第六編第三章四五四頁、四五八―四五九頁では、本作の根本思想の一つである、隣人愛の理想としての「実践的な愛」(действенная любовь) がゾシマ長老によって語られるし、第四編第五章二六六頁では、アリョーシヤの「実践的な愛」をめぐる印象深い叙述がある。деятель は通常「活動家、事業家」と訳されるので、「実践家」は辞書的な定義から多少ずれている。訳者は『実践』という語を、二つの意味——「1. 考えを実際に行なうこと。自分で実地に行ない、行為、動作に表わすこと。2. 人間が行動によって周囲の世界に働きかけて環境を意識的に変化させること」(小辞典『日本文学大辞典』)——を融合させた形で使用する。既訳は「事業家」(F)、「やり手」(G)、「活動家」(H、I、K、L)、「実行家」(J)、「実践家」(M) a figure (N) a man of action (O) an activist (P) un homme d'action (O) er handel (R) などを挙げる。
- (2) **重要なのは二番目の小説で……わが主人公の活動を描いている** 続編の構想について、ドストエフスキーは何も書き遺しておらず、アンナ夫人を始めとする何人かの知人の証言があるだけである。その細部はいっさい不明であるのみならず、全体のおおまかな展開や主人公像すら諸説あって、続編構想の問題は研究者たちの好奇心を大いに刺激してきた。この点については訳者「解説」で簡単に触れているが、くわしくは全集の解題 (TCC, 15・485-487) を参照してほしい。

第一編 ある家族の歴史

- (1) **十万ルーブリ** すべて金貨なら約十億円、銀貨なら約七億円、紙幣なら約二億円に相当する。以下、紙幣換算で概算を示す。
- (2) **できそこない** 原語は мозгики だ、通常は「ひ弱な人」(『アカデミー辞典』)の意だが、ここは「身体的、知的に劣る、役立たずの無能な人間」(『ウシヤコフ辞典』)に解する。
- (3) **『ロマン主義』の世代** ロシア文学におけるロマン主義の時代は、一八一〇年代から四〇年代前半までである。ドストエフスキーはポスト・ロマン主義の世代に属する。
- (4) **囚われの思考の高ぶり** ロマン主義の詩人レールモントフの短詩「信するな、おのれを信するな……」(«Не верь, не верь себе...», 1839) からの引用で、その冒頭四行は、「信するな、おのれを信するな、若き空想家よ、／疫病のこゝろ、靈感を恐れよ……／それはおまえの病める魂の重苦しいうわごと／あるいは囚われの思考の高ぶり」である。この詩の別の一行が中編小説『柔和な女』(一八七六)でも引用されている。

- (5) **突拍子もないでせう** 原語は пассажи (пассаж の複数)。пассаж はフランス語 passage に由来するが、フランス語にはこの意味はない。短編小説「鱈」(一八六五)の副題は「ブーケード街における突拍子もなでせう」と掛詞になっている。
- (6) **女がただ秋波を送りさえすれば……その腰に手をまわしかねなかった** 原文は в один миг готового прыгнуть к какой угодно юбке, только бы та его полюбила. ドストエフスキーと同時代の辞書『ダーリ辞典』によれば、юбка には「スカート」の意しかなく、直訳は「スカートが彼を手招きしさえすれば、どんなスカートにであれ、一瞬にしてすがりつきかねなかった」となる(英・仏・独訳では、この語を文字とおり skirt (N、P) petticoat (O) jupe (O) Weibetrock (R) と訳し、全体をほぼ直訳している)。だが、『十七巻辞典』には、юбка の転義的・口語的意味として「(男の情欲の対象としての)女性」が登録されており、『カラマゾフ』の当該箇所がその用例としてあがっている。拙訳はすべての邦訳と同様に、「女性」の意に解する(「腰に……」は原久一郎訳(G)にならう)。юбка はフランス語 jupe に由来するが、この語には「古語」女(小学館『ロベール』)と「仏和辞典」の意があり、ドイツ語には Er läuft jedem Weibetrock nach [彼は女と見ればすぐその尻を追いかけける](小学館『独和大辞典』)という成句がある(ロシア語にも За каждой юбкой он бегает とうとう同義の成句がある)。
- (7) **二万五千ルーブリ** 約五千万円。
- (8) **ミーチャ** ドミートリーの愛称。
- (9) **神学校出** 原語は семинарист だ、「seminaria の卒業生」の意。帝政ロシア時代の семинария には духовная семинария [神学校] と училищская семинария [師範学校] があり、ぶつこうに考えれば後者だろう(Kはそう解している)。だが、師範学校がペテルブルグに最初に設立されたのは一八六四年の初等国民学校令によるので、時代的には神学校と見なすべきである。十九世紀前半の神学校は六年制で、神学以外に、論理学、心理学、自然科学、歴史、医学などの一般教育も行なわれた。高等教育機関の神学大学が高位聖職者、神学者の養成機関(四年制)であるのに対し、神学校は中位・下位聖職者を養成した(『ブロックハウス・エフロン百科』)。
- (10) **今こそ逝かしめ給ふなれ** 『ルカ福音書』によると、エルサレム在任の信仰篤いシメオンは、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なないとお告げを聖霊から受けていた。幼子イエスが神殿に連れられてきたとき、彼はイエスを抱き、神を讃えて、「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます」(同二・二九)と言った。後続箇所は、「救い主を見た喜びと神への感謝、これから実現される救いに対する期待を示す詩として有名。ロシア正教では、「今こそ去らせてくださいます」で始まる詩行は一日の終わりに唱える晩課に取りいれられている(A)。シメオンを主題とする J・S・バッハの教会カンタータ第八十二番「私は満ちたりています」[Ich habe genug, BWV 82, 172] は、二百を超える彼の傑作ぞろいのカンタータの中でもっとも美しい曲の一つとして有名である。義人シメオンの敬虔な言が、フョードルにかかると、妻の死を喜ぶ復讐られ亭主の叫びに転ぜられる。聖書を始めとする多様なテクストの